

2020 年 6 月 7 日（日）「死の向こう側」

《聖書協会共同訳》コヘレト 2:12-17

12 また、私は顧みて、知恵と、無知と愚かさを見極めた。

王を継ぐ人が、すでになされたことを繰り返すだけなら、何になろうか。

13 私の見たところ、光が闇よりも益があるように、知恵は愚かさよりも益がある。

14 知恵ある者の目はその頭にあり、愚かな者は闇の中を歩む。

だが私は、両者に同じ運命が訪れることを知った。

15 私は心の中で言った。

「愚かな者の運命は私にも訪れる。並外れて賢くなったところで何になるのか。」

そこで、「これもまた空だ」と心の中でつぶやいた。

16 知恵ある者も愚かな者と同様にとこしえに思い起こされることはない。

やがて来る日にはすべてのことが忘れ去られる。

知恵ある者も愚かな者も等しく死ぬとは、何ということか。

17 私は人生をいとう。

太陽の下で行われる業は私にとって実につらい。

すべては空であり、風を追うようなことだ。

《新改訳 2017》伝道者の書 2:12-17

12 私は振り返って、知恵と狂気と愚かさを見た。

そもそも、王の跡を継ぐ者も、すでになされたことをするにすぎない。

13 私は見た。光が闇にまさっているように、知恵は愚かさにもまさっていることを。

14 知恵のある者は頭に目があるが、愚かな者は闇の中を歩く。

しかし私は、すべての者が同じ結末に行き着くことを知った。

15 私は心の中で言った。

「私も愚かな者と同じ結末に行き着くのなら、なぜ、私は並外れて知恵ある者であったのか。」私は心の中で言った。「これもまた空しい」と。

16 事実、知恵のある者も愚かな者も、いつまでも記憶されることはない。

日がたつと、一切は忘れられてしまう。

なぜ、知恵のある者は愚かな者とともに死ぬのか。

17 私は生きていることを憎んだ。

日の下で行われるわざは、私にとってはわざわざだからだ。

確かに、すべては空しく、風を追うようなものだ。

【序論】

頓知^{とんち}で有名な一休さんの本名は「一休宗純」で、彼は室町時代の臨済宗¹の僧侶でした。その生涯の中で多くの説話を残したそうです。私が子どもの頃、教会の母子室に一休さんの絵本童話が置いてあって、「屏風の虎退治」とか「このはし渡るべからず」などの逸話に心惹かれたのを覚えています。さて、彼の有名な格言に「世の中は食うてかせいで寝て起きてさてその後は死ぬるばかりぞ」というものがあります。これがどういう文脈で語られたかは知りませんが、諦観^{ていかん}の境地に至った偉人の皮肉にも聞こえます。「その通りその通り！」と笑って膝を打ってもいいでしょうし、「いやいや、人生とはそんな空しいものではないよ」と反論してみてもいいでしょう。ただ、彼が言っていることには一理あるのでありまして、人生とはそんなものだと言われてみればそんな気もしてきます。誰一人として「死」という現実を免れることはできない。そして、食っていくために懸命に働き、食っては排泄し、排泄してはまた食い…、そんなことを繰り返しながら老いていくのであります。「アンチエイジング」という言葉が流行するのも、「老い」という現実を受け入れきれない私たち人間の「闘いの爪痕」と言えるのかもしれない。時々、日々の料理に疲れた妻が「お腹なんか空かなければいいのに」とこぼしますが、確かに、食事を作っては食器を洗い、数時間が経てばまたお腹が空き、メニューを考え…そんなサイクルの中で一生を送る意味とは何なのだろうか…と改めて思われることがあります。人間として当然のことをしていると言えそうかもしれないし、この人生を空しく捉えようと思えばどこまででも進んでいける気もします。

【本論】

今日の箇所では著者が言っていることは、まさに死を直視したときの人間の感覚です。死が最終的な到達点であるならば、そこに至る過程がどうであれ皆同じではないのか。

本論 1. 知者にも愚者にも同じ出来事が起きる

また、私は顧みて、知恵と、無知と愚かさを見極めた。王を継ぐ人が、すでになされたことを繰り返すだけなら、何になろうか。(2:12)

¹ 悟りを開くことを目的とする禅宗。ここで言う「悟り」とは、「生きるもの全てが本来持っている本性である仏性に気づく」こと。「仏性」とは「言葉による理解を超えた範囲のことを認知する能力」。悟りは、坐禅、公案などの感覚的、身体的体験で伝承される。(Wikipedia 参照)

「知恵と、無知と愚かさ」と読点で二つに分けられていますが、原文では「知恵と無知と愚かさ」という具合に接続詞でつながられていて (תְּכֻמָּה וְהוֹלָלוֹת וְסִכְלֹת)、三者がズラッと並んでいます。「知恵」は既に1章にも出てきましたが、人間の生活において真理を適用する能力、洞察力、分別。「無知」と訳された言葉は「狂気の沙汰」といった強い意味を持ち、理性を失った人間の常軌を逸した行動がイメージされます。また、「愚かさ」は「馬鹿げたこと」と読み直してもよい言葉で、思慮に欠け、自分の行動がどういふ結果を招くか熟考しないことを表すでしょう。著者はこう言うのです。さて、生き方はいろいろとあるが、よく考えてみたら結局のところ人間の行き着く先は同じだと。

12 節後半で「王」についての言及がありますので、それに照らして「知恵」「狂気」「愚かさ」という事柄を考えてみましょう。「知恵」こそ、本来王たる者に求められるものでしょう。なぜなら、国のトップに立つ人の判断は多くの人の生活に甚大な影響を及ぼすからです。しかし、歴史を振り返りますと、国のリーダーは必ずしも知者ではないことが分かります。むしろ「狂人」のような人が世にはびこる傾向がある。国家の体制を変えるには狂人のような行動力を持つ人が求められるからかもしれません。その結果、法は破られ、多くの血が流されるようなことが起こる。その一方で、その人は別の側面で世に貢献している場合もあります。

12 節後半の「すでになされたことを繰り返す」がどういうレベルで言われているのか、検証が必要でしょう。可能性はいくつかあると思います。

- ①次期王も結局のところ大きな社会変革などできないだろう
- ②どの王がやっていることも、よく見るとやはり同じ過ちの繰り返しだ
- ③人間社会は基本的に同じシステムで動いていくほかはない

いずれにしても、人間に対する過度の期待を捨て去った人の諦めの境地と言えましょう。人間がどんなに知恵を用いても愚かさが入り込む可能性がある。逆に、狂人的行動を「知恵」と見なす人もいる。知恵と愚かさは時として区別がつかないこともある。人類史はずっと不完全な人間によって運営されてきています。

本論 2. 死はすべての人を飲み込む

私の見たところ、光が闇よりも益があるように、知恵は愚かさよりも益がある。知恵ある者の目はその頭にあり、愚かな者は闇の中を歩む。だが私は、両者に同じ運命が訪れることを知った。(2:13-14)

「知恵は愚かさよりも益がある」という表現からは、大変な皮肉が感じられます。知恵がある方が愚かであるよりはまだマシだと言っているのでしょう。しかし、知恵があって

もなくとも、最後は同じである。「同じ運命」すなわち「死」が待ち受けているのだから。分別ある生き方をしても、私利私欲に身を任せたとしても、違うところに到達するわけではない。

「知恵ある者の目はその頭にあり」という表現は面白い（「頭に目がある」新改訳 2017）。知恵ある人は先を見通し、自分の現在の行動が未来にもたらす結果を見極めるということでしょう。人間は他人を見るときに、「あの人、あんなことをしたらどういう結果になるのか分からないのかな」と冷笑するものですが、いざ自分のこととなるとそうはいきません。目の前に甘い誘惑がぶら下がっていると、それを手にした後どういう結果が待ち受けているかが見えなくなってしまうのです。瞬間的に理性が働かなくなったり、自分がやろうとしていることが正しくないと分かっているが、正当化する理由を作ってしまう。知恵はあっても知恵に従えないケースもたくさんあります。

私は心の中で言った。「愚かな者の運命は私にも訪れる。並外れて賢くなったところで何になるのか。」そこで、「これもまた空だ」と心の中でつぶやいた。（2:15）

今日の箇所は何度か出てくる「運命」という言葉は、原文では「מִקְרָא／ミクレー」という語が使われており、本来の意味としては「出来事」（event）です。「運命」「結末」と訳してしまいますと、逃れがたい不吉なイメージを読者に与えますが、著者はそこまで強い表現は使っていません。「死」とは誰もが通る「出来事」である。皆その「出来事」へと向かっているのだ。知者も愚者も、死んだら皆同じだと。

知恵ある者も愚かな者と同様にとこしえに思い起こされることはない。やがて来る日にはすべてのことが忘れ去られる。知恵ある者も愚かな者も等しく死ぬとは、何ということか。

（2:16）

ここに来て初めて「死ぬ」（מוֹת／ムース）という言葉が使われました。ずっと婉曲的に言われてきた「出来事」の正体がここに現された感じです。本節の内容は検討が必要でしょう。知者も愚者も同様に永遠に思い起こされないとされていますが、必ずしもそうではないかもしれません。なぜなら、良い働きをした人の名は語り継がれ、反対に歴史に汚点を残した人の名も刻まれるからです（聖書では、ポンテオ・ピラト、イスカリオテのユダなど）。しかし、ここでは恐らく、その人は死んだら人生を取り戻すことはできず、その後誰かに知られようが知られまいがもはや関係ないということが言われているのでしょう。また、やがてこの世界には終わりがきて、人類史で起きたすべての出来事が消え去ると言われているのかもしれませんが。いずれにせよ、人生は「生き方」においては不平等でありながら、「死ぬ」という一点においては平等なのです。

本論 3. 死の先がなければ地上の労苦は厭うべきもの

私は人生をいとう。太陽の下で行われる業は私にとって実につらい。すべては空であり、
風を追うようなことだ。(2:17)

今日ここまで語られてきた内容を受けて、著者は人生そのものを厭うと言います。「厭う」(אָׁׁן／サーネー)とは、「hate」「憎む」という強い意味を持つ動詞です→「私は生きていることを憎んだ」(新改訳 2017)、「わたしは命を憎んだ」(フランシスコ会訳)。

聖書の中に数名、自分の人生を呪った人がいます。そう、ヨブやエレミヤです。

- ・ この後、ヨブは口を開いて、自分の生まれた日を呪った。ヨブは言った。私の生まれた日は消えうせよ。男の子を身ごもったと告げられた夜も。その日は闇となれ。高みにおられる神が顧みず、光もその日を照らすな。その日は闇と死の陰に贖われ、雲に覆われ、日を暗くするものに脅かされよ。その夜は暗闇に捕らえられ、年の日々を楽しまず、月々の数に加えられるな。その夜は不妊となり、喜びの声も上がるな。日を呪う者レビヤタンを呼び起こすことのできる者がこれを呪え。タベの星も暗くなれ。その夜は、待ち望んでも光は射さず、夜明けのまばたきも見えないように。それが私を宿した胎の戸を閉ざさず、私の目から労苦を隠さなかったからだ。(ヨブ 3:1-10)
- ・ 呪われよ、私の生まれた日は。母が私を産んだ日は祝福されてはならない。呪われよ、私の父に「あなたに男の子が生まれた」と言って伝え、彼を大いに喜ばせた人は。その人は、主に覆されて、慰めも受けない町のようになれ。彼は、朝には叫び声を、真昼には関の声を聞くであろう。その日に、私を胎内で死なせず、母を私の墓とせず、その胎をいつまでも身ごもったままにしておかなかったからである。なぜ、私は胎から出て、労苦と悲しみに遭い、生涯を恥の中に終えなければならないのか。(エレミヤ 20:14-18)

ヨブはすべての持ち物、そして健康も取り去られたとき、自分の生まれた日を呪いました。エレミヤは、迫害を受けると分かっているながらも民に語らなければならない預言者としての重い使命ゆえに、自分の生まれた日を呪いました。

人は誰一人として自分の意志では生まれてきません。親となる人々の思いの結果であります。その生まれてくる環境も誰も選ぶことはできない。生まれるとは「受動的」な出来事なのです (I was born)。もし自分の子どもの口から「私は生きていることを憎む」という言葉を聞くとしたら、それは親にとって辛いことでしょう。私も厄介な皮膚炎に見舞われたときに、生きていること自体が苦痛であると感じました。人生の到達点は死であるという事実がすべての人に共通しているのであれば、自分だけその辛い現実を免れ得るとは誰も言えないはずです。誰の口からでも発せられる可能性のある言葉なのです。更に、この世に生まれるということは、この世の不条理を見ないではいられず、

それと戦う苦しみ、あるいは戦わずに妥協してしまった敗北感というものを必ず味わうことになるでしょう。老いがあり、病があります。そして、人生の諸々の営みとどんなに格闘しても、やはり墓に入らなくてはならない日が来る。では、人は何のために戦っているのか。

【結論】

今日も著者のメッセージを掴む努力をしまいいりましたが、コヘレトは分かっているがなかなか言葉にしない事柄があるのです。それは常に「もし神なしに生きたなら」という前提です。この著者はどこまでも厭世的な世界観を描きながら、隠された真理を暗に提示している。それは、「死の向こう側」です。「死んだらそれで終わりではないですよ。あなたは死んだ後、あなたに人生を与えた神と出会わなければなりませんよ。そこで、どのように生きたか、すべての日々が明らかにされますよ」と。この無言のメッセージを聞くと、私たちはどういう心境になるのでしょうか。そこには恐怖があるか、希望があるか。キリスト者は次のような約束を受けています。

イエスは言われた。「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。」

(ヨハネ 11:25)

旧約聖書は、やがて来られる方、キリストの影です。「コヘレトの言葉」も例外ではなく、この人生の「空しさ」をひっくり返すことのできる方、死を克服することのできる方の到来を待ち望んでいるのです。

【祈り】

アルファであり、オメガであられる神よ。万物には初めがあり、終わりがあります。そのすべてを支配しておられるのはあなたです。私たちもこの世に生まれ落ち、延々と続く日々のサイクルの中で労苦しています。時には、この人生そのものを呪いたくなるような過酷な出来事にも遭遇します。そして、やがて終わりの日が来ます。しかし、一見無意味とも思われるこの人生の営みは、あなたとの関わりによって永遠的価値を持つようになります。復活の主イエス・キリストとの出会いによって、私たちの人生は地上だけのものではないことを知りました。神と共に永遠に生きる存在とされていることを感謝いたします。そして、その新しい価値観に基づいて、地上の歩みをひと足ひと足踏みしめてまいります。その小さな足跡さえも、あなたは心に留めてくださると信じます。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人に生涯を通じて労苦を与え、その人生が神の御手の中にあることを示し給う、父なる神の愛、

神との関係を喪失した人間に、復活のいのちを与え給う、主イエス・キリストの恵み、限りある日々の営みに、神との関わりの中で、永遠的価値をもたらし給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。